C—68 現代手法に依る彌生時代文化の回想

芦屋女子短大　谷川寿枝

目的　長い狩猟生活の縄文時代より，文化の曙とも考えられる稲作彌生時代の開幕は，僅か600年間であり乍ら，人間生活の大改革であったと云えましょう。日本に入り来った初の大陸文明に人々は驚き，慌てて農耕に立ち向った事でしょう。そして収穫の喜びに，落着きを取り戻した時，日本人そのものの本質を，何處かに持ちつづけつつ，生活に美術に進めて行ったようです。この時代の遺物を，現代の手法にて回想したいと思いました。

方法　土地造成時代に伴う多くの遺跡の発見と破壊は，日本中に一杯になり，その一つ一つを訪れる事は不可能ですが、やはりその風土に接したく，出来るだけ遺跡を廻って見るようにしました。縄文時代と異なる土器施文の差異，器体の美，銅鐸文様の素晴しさ，前漢・新・後漢より渡来の鏡背文様と倣製鏡のユーモアー等を，刺繍・木彫等にて身の廻り品に撲してみました。

結果　彌生時代は短い期間であり乍ら，何と範囲がひろく，掴み難いのかーーーと，悩みは倭人伝から耶馬台国論へと，大分頭が混乱しましたが，見学と製作を続ける間にその限界がだんだんひらけ，私なりに農耕開幕と村落の発生，そしてどこの歴史にもあるように，財産を守る争いの日日から权力者の統合への様相が判りかけて来たように感じます。そして，まだまだ素直さ一杯の彌生文様に大きな魅力を指先で辿りつつこの研究が出来ました事を喜んで居ります。